

# 嵐牛

## 友の会便り

### 第三号

2015.11.05発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

#### 目次

- [1]加藤知碩御子孫とわが家  
伊藤鋼一郎
- [2]友の会便り二号を拝読して  
岡本春一
- [3]嵐牛先生  
ありがとうございました  
鈴木安子
- [4]嵐牛・人と作品(3)  
倉島利仁
- [5]柿園友垣抄(三)  
加藤定彦
- [6]解読・鑑賞の会  
今後の予定
- [7]嵐牛蔵美術館 近影

### 加藤知碩御子孫と我が家

#### 伊藤鋼一郎

三十数年前ふるさとに戻り、この地に支店を登記し、掛川での仕事を始めました(今では掛川が本店ですが)。私のデスクワークは建築構造設計で、得意先は所謂建築設計事務所、設計部のある総合建設業です。加藤知碩さんは早くから嵐牛の高弟で豊浜の出であることは知っていました。御前崎市の加藤設計さんは帰郷した時から構造設計を手伝わせていただいており、所長の加藤淳さんは豊浜の出身と聞いたので、もしやと思いついてみましたら、なんと加藤知碩さんの子孫であることが分かりました。以来ずーっと構造設計は手伝わせて頂いております。その上、愚息が学校を出て就職口がないと事務所に入れていただき、建築設計の修行をさせていただきました。おかげで一級建築士の資格も取得でき、今では我が事務所の後継者として成長してくれました。大変ありがたく感謝しております。嵐牛の門人が知碩さんで、加藤淳さんの教え子が愚息で、お互い五代くらい前の縁が今につながり、嵐牛に感謝です。このような縁は大事にしていきたいと日々考えています。加藤知碩さんの直系の子孫の鈴木安子さんも、何年前に我が家に訪ねて来ていたでいて、友の会の会員になっていたでいております。今回原稿を依頼したところ快く引き受けていただき、嵐牛友の会便りの一ページを飾っていただくこととなりました。合わせて感謝申し上げます。

(「嵐牛・友の会」会長)

### 友の会便り二号を拝読して

#### 岡本春一

嵐牛さんの時代はまさに松尾芭蕉の世界、俳句が一番生き生きとしていた時代ではなからうか。

#### 黄鳥と枕はちかき草の庵

夕暮れと断った一句ではあるが、この時期は朝早くより、または昼寝時うとうと寝ながら、草庵の近くまで来て美しい声で鳴く、ホウホヘキョウ・ウグイスの谷渡りに聞き惚れている。作者も幸せなひと時を過ごしていたと思われる。石川依平も嵐牛に宛てた和歌「庭上竹」で新築の伊藤家の繁栄を願った一首に、屋敷に呉竹のあった事を詠っていることから、ウグイスも日ごとに訪れていたことだろう。

昔はこの家にも近くに竹藪があつて、ウグイスの鳴き声に聞き惚れたものだ。今は開発が進んで家の近くでは滅多に聞くことはない。わが家でも裏は竹藪で、安政の大地震ではこの竹藪に仮寝して、地震の合間に家に飛び込んだり、必要なものを持ち出したと祖父の話だが、今は息子が石垣にしてしまったから、寝ながらウグイスの声を聞くことは不可能である。

(「嵐牛・友の会」会員)



嵐牛先生ありがとうございます

鈴木安子

加藤知碩が俳句を詠むようになったのは、掛川の嵐牛先生の教えを受けてのことだったと、豊浜で出会った方々から口ぐちに伝えられてきました。

私が知碩について特別な関心を持つようになったのは、父方の祖母と一緒に暮らした小学校四年から中学三年の五年間でした。たまに祖母を訪ねてみえる友達と祖母の会話の中で、「知碩さんが……」とか、「文字を書くための墨をする作業がね……」とか話している声を聞いていました。「書いた物もたくさんあるのでしよう？」という話もしていたように思いますが、家には何一つ残っていないようでした。そうか、この家には知碩という人がいて、俳句を詠んだり字を書いたりしていたらしいということを知りました。

その頃、私の父母は戦後のゆとりのない生活でしたので、そのような昔語りをする余裕もなかったのでしょう。また、もともと無口な二人だったので、子どもたちはこの家はもともと豊浜（中野）という所にあったということすら話してもらえませんでした。

それから数十年後、平成に入ってからのことです。母方の親戚から、今はもう取り壊されてしまっていないけれど、知碩の住んでいた家を知っているという話がありました。家のルーツを探る思いで、磐田郡の中野という所へやってまいりました。そこで町の名士の方々からいろいろなものを見せていただいたり、聞かせていただいたりして、とても感動しました。そして、とても嬉しく思いました。知碩の句は、「全部でいくつ？」と思うほど、いろいろなお家庭に残されているようです。その後、知碩没後にまとめられた発句集を借用して、菊川町きくがわ文庫館長さんにお願ひして一冊の本にさせていただきました。こんなことができたのも、多くの方々にお世話になったおかげであり、端を発すれば嵐牛先生のお教えによるものと感謝で一杯です。

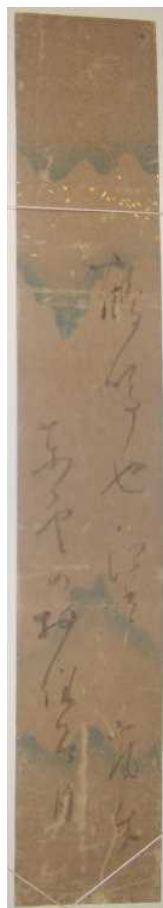
嵐牛先生のご住所を調べましたところ、自宅からそんなに離れていないようでしたので、お邪魔することにしました。お伺いして、一度感謝の気持ちを表したいと思いました。その時限りでご迷惑をおかけしないつもりでいましたが、恥も外聞もなく現れた私に、伊藤様ではびっくりなさったことでしょうか。ご親切にしてくださいまして、どうもありがとうございます。

（「嵐牛・友の会」会員）

嵐牛・人と作品（3）

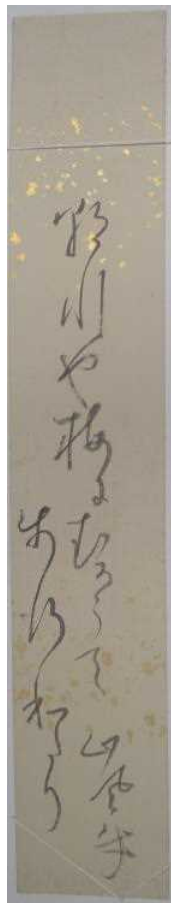
倉島利仁

去る八月十六日（日）に掛川市立大東図書館で行われた第三回講読・鑑賞の会の席上において、大東図書館翠亭文庫所蔵の嵐牛短冊を閲覧、鑑賞する機会を得たのは大変ありがたかった。職員の木佐森様には改めて感謝申し上げる。ただ、その場では時間の制限もあり、解説することもできなかったのので、ここに許可をいただいで写真を掲載し、説明を少々加えたい。



鶴鳴や江は東雲のおぼろ月 嵐牛

この句は『嵐牛発句集』春の部、『柿園評月並』慶応二年二月に見られる他、伊藤家にも同句を認めた短冊が二点ある。季語は「おぼろ月」。「東雲」は東の空がほんのりと明るくなる明け方の時分をいう。鶴の鳴き声が鋭く聞こえる。鶴の鳴く「江」は、湖沼や入り江のような場所だろう。明け方の水辺を西の空に残った有明の月がぼんやりとほのかに照らしている。



朝川や梅にむかうて歩行わたり 嵐牛

『嵐牛発句集』春の部、『そのまま四』の他、これも伊藤家に同句の短冊が一点ある。この句は第二回の会で読んだが、まだ春も浅く寒い朝、柿園の庵の前の逆川だろうか、対岸に咲いた梅の香に惹かれて、凍るような冷たい流れを歩行渡りする様子を詠んでいる。先の句や、第三回の会で話題になっ

た「水けぶるうへに夜明の柳かな」など、春霞が立ちこめた春の夜明けの朧気な情景を詠んだ句が印象的である。



亦鳴とひとりおもふや閑呼鳥

嵐牛

『嵐牛発句集』夏の部に所収。季語の「閑呼鳥（閑古鳥）」は郭公の別名で、その鳴き声からもの寂しい様子をもいう。閑古鳥が寂しそうな声でまた鳴いていると、嵐牛自身も一人寂しく思っている。草庵における作者の孤独な姿を思わせる句である。



老懶

朝夕や待たす、きもはやわびし

嵐牛

この句は『柿園評月並』慶応二年九月、慶応三年刊『木かくれ集』に見ることが出来る。題の「老懶」は年老いて物憂いこと。「朝夕」は朝と晩、毎日、いつもの意。朝に晩にと毎日秋の到来を待っていたが、すでに秋も深まり、すすきの姿は早くも侘びしくなってしまった。年をとるとともに、みるみると季節が過ぎてしまう時の速さを実感し、また凋落の季節を迎えたもの寂しさが感じられる。先の句と同様、嵐牛の孤独な草庵生活を想起させる。

〔嵐牛・友の会〕幹事補佐



### 柿園友垣抄(三)

——四天王、その①——

加藤定彦

「友の会」の折、嵐牛門下の四天王、知碩の資料をまとめた『加藤知碩集』(二〇〇七年刊)を、編者の鈴木安子さんにお願ひして頒けて頂いた。よって、知碩の略伝と感銘を受けた作品を何句か紹介してみたい。

巻末の「加藤知碩のこと」によると、知碩は文化十一年(一八四四)、遠江国山名郡中野村(現、磐田市豊浜中野)の農家加藤家に生まれ、通称吉重、名を多陰といった。別号は麻麦園、早苗庵など多くがある。同じ中野村の先輩加藤直吉、鳳嶺に勧められて俳諧を学び、『俳諧どめ』によると、嘉永七年(一八五五)、知碩四十歳の頃、中野や隣村福田(磐田市)、岡崎(袋井市)などを歴遊中の嵐牛に入門して連句指導をうけ、はじめは知石と号した。

一日の農作業を終えてから汐井川原の嵐牛宅まで約六里(24キロ)の夜道を通って学び、翌日の仕事も怠ることがなかったと逸話は伝えるが、『俳諧どめ』によれば、毎年のごとく来村する嵐牛に近隣連中とともに指導を受けたり、慶応期の嵐牛の日記などに照らして、年始や芭蕉忌興行などを除けば、通常、柿園の月並に投句したり、手紙で連句の指導を受けたというのが実情であろう。

柿園一門の『其ま、集』には初編(安政三年・一八五五)から参加、それには発句十三が入集し、

捨鶏の人をしたふや札納

知石

の佳句も交じるものの、やや平凡で低調に終っている。

しかし、二編(翌四年)になると、

飛ぶ蝨火によるまでに弱りけり

知碩

燃えしきる櫛にも蟻の行来かな

〃

といった生命の根源に迫る秀吟が散見、次第に地域の指導的存在と目されるようになる。

明治九年(一八七六)五月二十八日、師嵐牛が亡くなり、その冬、日坂で百ヶ日の追善連句を師の息洋々と興行する。翌年には東京から来遊した橘田春湖を交えて一周忌の祭筵を設け、秋には追善集『山月集』を編纂し、四天王の今一人足立湛水が序を草し、知碩は跋を寄せ、  
是からは塚をたよりや夏木立

知碩

の悼句も手向けている（翌十一年九月、柿園社中蔵版）。

明治三十四年（一九〇一）、知碩は、早苗庵社中の編纂した『米寿祝賀句集』を贈られ、天寿を全うした。翌年、社中の秋野湖洲が『知碩発句集』を刊行、その内の二句を紹介する。

すげなきも又ひとさびや枯尾花  
木がらしや夜すがら落る崖の砂

（「嵐牛・友の会」顧問）

### 講読・鑑賞の会の予定

第四回 十一月十五日（日）

第五回 一月十七日（日）

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳  
時間 午後一時三十分～四時三十分  
内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞  
嵐牛発句集購読 ほか

※ 友の会に対するご要望等お聞かせください  
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がり面白いこと  
がありましたらご投稿ください。  
次回は加藤先生により、嵐牛の最初の門人で高弟である  
大竹晴笠について書いていただく予定です。

今年には柿の生り年のようです  
樹齢百年を超えた柿園の柿  
青空に美しく輝いて見えます



平成二十七年十月十三日 撮影

事務局

伊藤英子